

一般にジュネーヴ言語学派 *Ecole de Genève* は、フェルディナン・ド・ソシュール (1857-1913) が1891年から1912年まで教鞭を取っていたジュネーヴ大学を拠点に、ソシュールの弟子たちが形成した学派とされる。ソシュール理論を解釈しつつ継承・発展させたこの学派は、現在も活動しているが、学会としては、ジュネーヴ言語学会 *Société Genevoise de Linguistique* の組織化が1940年、その学会紀要にあたる雑誌 *CFS* (『ソシュール研究誌』)<sup>〔1〕</sup> の創刊が1941年である。とはいえ、実質的な活動はおそらく1910年代から始まっていたと考えられる。

拙稿では、セルゲイ・カルツェフスキー (1884-1955) と、その同時代のジュネーヴ言語学派の人々、すなわち、カルツェフスキー同様ソシュールに直接の教えを受けた世代とを中心に取り上げる。具体的には、カルツェフスキーの師にもあたるシャルル・バイイ (1865-1947)、アルベール・セシュエ (1870-1946) らの世代である。この二人を名誉会長としてジュネーヴ言語学会が設立された時、その実質的な組織化に寄与し、副会長として活躍した上、雑誌 *CFS* 発刊も手がけたのが、カルツェフスキーであった。

カルツェフスキーは、初期にソシュールに学んでいたこと、ブラハ言語学サークルの解散 (1939年) 後にジュネーヴ大学に移り、約十五年間もジュネーヴ言語学会で活動していたことなどから、時には研究者にジュネーヴ言語学派の一員と見なされることもあった。<sup>〔2〕</sup> 確かにカルツェフスキーは、ソシュールの理論を枠組とした言語学を展開している。またそれゆえ、彼の論文における術語、例えば、ラング、パロール、シーニュ、シニフィアン、シニフィエ、形と実質などの術語も、ソシュールによるところが大きい。さらに、シンタグマの概念は師バイイから引き継いでいると彼自身が記して

いる。

しかしそれでもなお、カルツェフスキーがジュネーヴ言語学派の言語学者だと言いきってしまうことには疑問が残る。プラハ言語学サークルにおける他の学者たちも、またそれ以外の学派の学者たちも、ソシュールの術語や理論を、修正を加えながらもかなりの程度まで受容したのである。カルツェフスキーがジュネーヴ言語学派の学者であったか、プラハ言語学サークルの学者であったか、といった問題を論じること自体、彼が両学派の特徴を兼ね備えた人物であった以上あまり意味のあることではないが、旧ソ連の研究においてカルツェフスキーがジュネーヴ言語学派の人物であったことを必要以上に強調している場合、その理由について触れるとすれば、それは、例えば、彼が亡命者であったため、といった政治的な理由にあるのではないかと考えられる。

以上、カルツェフスキーの位置づけを先に述べたが、その具体的な理由を検討する前に、まず彼の経歴を、その研究の経緯と共にまとめておこうと思う。

カルツェフスキーは、1884年8月28日、シベリアのトボリスクに生まれた。<sup>33</sup> 1903年に教職免許を取得した後、2年間、トボリスクの市都ナフラッチの初等学校教師の職につく。その後、ニジニ・ノヴゴロドの公立図書館に、分類目録の刊行をする役職を得て赴任した。実際には図書館の仕事に転職したというよりはむしろ、反体制活動に参加するために身分を変えたと言った方が良いでしょう。この時期には、社会民主党の黨員としてロシア中をまわり、コーカサスにも旅行しているからである。また、カルツェフスキーは、幾つかの雑誌に寄稿するなど、様々な執筆・出版活動にも携わっていた。

しかし、1906年にモスクワで政治活動を理由に逮捕されたあと、彼の人生は大きく変化する。翌1907年、(パスペロフの説では1906年<sup>34</sup>)、脱獄してスイスのジュネーヴへ亡命し、ジュネーヴ大学に学ぶことになったのである。なぜジュネーヴ大学を選

んだのかについては、ジュネーヴが当時ロシアからの政治犯の亡命先として確立しており、知縁を頼り易かったということもあったようだが、その他にも考えられる理由としては、トゥリオ・デ・マウロが、カルツェフスキーが1905年からすでにソシュールの学説に接していたことを指摘している。<sup>(5)</sup>

いずれにせよ、言語学科に入学した学生カルツェフスキーはソシュールに師事し、その学説に大きな影響を受ける。この時、ブーヴィエ、バイイ、セシュエらにも師事している。ジュネーヴでは文筆活動もしており、ペテルブルクの小説コンクールに入賞し、作家ゴーリキーに雑誌『ズナーニエ』への執筆を勧められたりもしたが、結局、言語学者としての道を選ぶことになる。

1911年から1912年の学年度にソシュールが行ったサンスクリットの講義を記録した、カルツェフスキーの聴講ノートは現存している。1914年にジュネーヴ大学を卒業（文学士）した。補足だが二年後の1916年、ソシュールの『一般言語学講義』が出版されている。よく知られているようにこれはソシュール自身の著作ではなく、ソシュールの弟子たちの講義ノートをまとめたものだが、カルツェフスキーは、この本から引用を行っている。この本の元となった一般言語学の講義は1907年1月から1911年まで行なわれていたので、1905年（あるいは1906年）から1914年までジュネーヴ大学に学びソシュールに師事していたカルツェフスキーがこれを聴いた可能性は高い。とはいえ、実際に聴いたという確証は今の所ない。

1917年、革命後のモスクワに戻れることになったカルツェフスキーは、1919年3月まで2年間、形式主義のフォルトゥナトフ学派からの脱却を目指すモスクワ言語学サークルのメンバーに加わった。この2年間はカルツェフスキーにとって、おそらく、後のブラハ言語学サークルでの実り豊かな研究の下地を備えた大切な時期であったと思われる。このサークルでもモスクワの他の場でも、カルツェフスキーはソシュール理論を熱心に伝えていた。デ・マウロは、彼がモスクワの科学アカデミーにおいて、さらにその後エカテリノスラフ大学において言語学の講師としてソシュール理論を講

じたことについても触れている。<sup>6)</sup>

しかし、1920年には彼は再び国外へ出ざるをえなくなり、度帰国することはもはやなかった。ストラスブールへ移住したカルツェフスキーは、約2年間、アントワン・メイエ(1866-1936)勤務していた大学で教鞭をとる。同時にメイエの指導のもとで言語学の研究を行った。出国前にモスクワで始めた『ロシア語動の体系』の執筆は、ストラスブールでも続けられた。

1923年に、カルツェフスキーは、プラハへ移住した。同年、彼はプラハで雑誌RSR(『国外でのロシアの学校』)<sup>7)</sup>を発刊する。編集はカルツェフスキーが中心になって続けられ、約六年間継続発行された。この雑誌においてカルツェフスキーは、言語理論に関する論文、教育方法の論文、書籍紹介文や批評など、多くの執筆活動をしている。1925年、論文『形式文法派について』<sup>8)</sup>の発表も同誌上である。これとは別に、同1925年、彼は有名な教科書『ロシア語』<sup>9)</sup>を出版している。

1926年、カルツェフスキーは、ヤコブソン、トゥルベツコイらと共に、プラハ言語学サークルを設立した。<sup>10)</sup>このサークルには、他にマテジウス、トゥルンカ、ハヴラーネック、ムカジョフスキーらが所属していた。やがて1928年に、オランダのハーグにおける第一回国際言語学者会議で、このプラハ言語学サークルが発表した宣言が、構造主義の立場、とりわけ機能重視の立場を明らかにしたという点で注目されることになる。なお、カルツェフスキーは1927年に、モスクワ以来長期にわたって執筆していた『ロシア語動詞の体系』で、ジュネーヴ大学の博士号を取得している(この時はまだプラハ在住である)。1928年には、1925年の『ロシア語』の続編の形で『ロシア語復習教程』を出版した。また、1929年に、彼はジュネーヴにスラヴ語スラヴ文学センターを設立し、36年までの7年間、所長を務めた。このことも、雑誌RSR発行や母国語教育に関する一連の著作<sup>11)</sup>とともに、「国外での」ロシア語学者、ロシア語教育者という立場への彼の自負のようなものを垣間見せる。

この時期に出された、もう一つの重要な雑誌としては、1929

年から1939年まで発刊されたTCLP（『プラハ言語学サークル論集』）全8巻<sup>〔12〕</sup>がある。これはプラハ言語学サークルの機関誌である。TCLPにもカルツェフスキーは幾つかの論文を発表している。その一つに論文『言語記号の非対称的二重性』（1929）<sup>〔13〕</sup>がある。これについては後述する。雑誌TCLPは1939年3月に侵攻してきたナチスに弾圧され、TLPとして再刊される1964年まで休刊を余儀なくされたが、プラハ言語学サークル自体も、1939年、学生の示威運動に対してナチスが大学を閉鎖したため活動を打ち切らざるをえなくなっていた。カルツェフスキーは同年、第二次世界大戦勃発と同時に、ついにプラハを脱出し、再びジュネーヴへ移住する。ちなみにヤコブソンもこの年プラハを離れ、デンマークに移住している。

カルツェフスキーは母校ジュネーヴ大学で教鞭をとり、ロシア語ロシア文学科で後進の指導にあたりつつ、冒頭に触れたように、1940年にセシュエとバイイを名誉会長とするジュネーヴ言語学会を設立した。彼自身は副会長として活動し、雑誌CFS創刊を1941年に手がけ、またその後のCFSの発刊にも携わった。1954年、ジュネーヴ大学を引退し、翌1955年11月7日、死去した。CFSの第14号（1956）はカルツェフスキーの追悼号で、彼の幾つかの論文、（すべてを網羅してはいないが）業績表、簡略な伝記を掲載した。

以上概観したような経歴により、より一般的な説明として、しばしば、カルツェフスキーはジュネーヴ言語学派とプラハ言語学サークルの両学派にまたがる人物だ、と表現される。これはその通りではあるが、この「またがる」という表現は、必ずしも、単にカルツェフスキーの若い頃のジュネーヴ亡命生活や、1923年から1939年までのプラハ生活、その後の二度目のジュネーヴ生活（1939～55）のことを指しているのではない。強いて彼の傾向をおおまかに言うならば、むしろ地理上の移動とはあまり関係なく、機能主義の立場を明確にする1930年前後から、ジュネーヴ言語学

派からプラハ言語学サークルへという移行をとげていった、と見るべきであろう。ただし、完全にプラハ言語学サークル的になったとも言いきれない点が、まさに「またがって」いるという観察に結びつく点も強調したい。

概略的に言えば、ソシユール理論を精密化する傾向のジュネーヴ言語学派に比べ、プラハ言語学サークルは、ある程度の批判と修正を加えつつソシユール理論を受容した。共時態と通時態の解釈はその一例である。すなわち、通時態と共時態を動態と静態という対立と見なし、通時態は諸価値の変動で、共時態がその断面だにとらえるソシユールの硬直した解釈に対し、プラハ言語学サークルの有名なテーゼでは、通時言語学でも体系、機能の概念を考慮しなければならないだけでなく、共時言語学においても進化の観念を排除してはならない、という主張がなされている。これは今日では常識的だが当時としては進歩的な主張であった。

カルツェフスキーも、共時態は静止していることと同義ではないと、繰り返し主張している。プラハ言語学サークルの他のメンバーがバイイ、セシュエらの編集した『一般言語学講義』でのみソシユールに接したのとは異なり、カルツェフスキーは直接ソシユールに学んだことから、サークルの中で最も忠実なソシユール理論の継承者とされていた。しかしそのカルツェフスキーにおいても、結局共時態に関するソシユール理論受容は変容を伴うものだったのであり、彼の場合にも、言語構造を機能という視点から見るプラハ構造主義の特徴的な傾向が見られるのである。

そもそも、ジュネーヴ言語学派に関して言われる「ソシユール理論の忠実な継承と精密化を志す」という特徴自体、注意して考察しなければならない。というのは、この特徴は、結果的には学説上の方向づけとしてはあまり強力なものではないからである。つまり、ソシユール理論という出発点からは意外なほど多種多様の方向づけが可能なので、ジュネーヴ言語学派の学者たちのあいだに学説上の一致はそれほど劇的には生じないのである。ジュネーヴ学派を別名

ソシュール学派と呼ぶ場合もあるが、一方で言語理論史においてソシュール学派の中にイエームスレウに代表されるコペンハーゲン学派すら含める立場もあるほど、「ソシュール理論の継承」とは広義になりうるものなのである。

少なくとも、ジュネーヴ言語学派における学説上の一致は、ブラハ言語学サークルほどには生じない。具体的に比較すると、例えばバイイはソシュールの弟子の中でも熱心なソシュール支持者であり、長年ソシュールの同僚でもあった人物だが、共時言語学の理論を精密化して、一般言語学だけではなく文体論の分野でも活躍した。彼がセシュエと共に編纂した有名な『一般言語学講義』におけるパロールの扱いには、他の学者からの異論も多かったことをあらためて指摘したい。バイイがパロールについてソシュールの述べたとおり正確には記述していないという批判が、その主な内容であった。

バイイの文体論がむしろ情緒表現の研究としての特徴を備えていることにも見られるように、バイイは、ソシュール理論をかなり独自に発展させた（あるいは「ソシュール理論のぬけた部分であるパロール論をおぎなうものと説明される場合もある」と言える。なお、バイイの言う文体論は今日一般に言われているものより狭い領域で、「ごく普通の人が、日常の言葉使いの中で、無意識かつ自然に発する表現」<sup>14)</sup>のみを対象としたものである。

先にソシュール理論を出発点とする、と述べたが、以下にジュネーヴ言語学派のメンバーの、ソシュール理論の解釈・継承の方向性についてもう少し検討してみたい。

ソシュールにおける大きな言語学上の概念としては ①ラング／ランゲージュ／パロールの三分法 ②形と実質の各概念 ③共時態と通時態 ④記号学 ⑤関係の体系としての言語（連辞関係、連合関係など） ⑥恣意性、などがあげられよう。

先に述べたようにバイイは主に①におけるパロールの、しかも情緒的表現の研究で有名であるが、もちろんそれ以外の②から⑥についても師ソシュールの理論継承に活躍しており、そのことは、例えば⑥について、エミール・ヴァンベニストの『言語記号の性質』におけるソシュール批判（記号とその指示するものとは密着している

という主張) <sup>15)</sup>に反論して記号の恣意的性質についてまとめたりしていること <sup>16)</sup>などに見ることができる。

セシュエは、主に③の問題についてエリク・ビュイサンスの『ソシュールの6つの言語学説』 <sup>17)</sup>という批判に応答する形でまとめた論文 <sup>18)</sup>が評価されている <sup>19)</sup>。これは通時言語学と共時言語学をソシュールの論理の枠内でまず整理した後さらに分析を進めようとした試みである。

アンリ・フレエ (1899-1980) も、他のジュネーヴ言語学派の人々と共にソシュール理論を検証した論文 <sup>20)</sup>などを1939年に発表しているだけでなく、それ以外にも、『誤用の文法』 <sup>21)</sup>という、主に⑤に関する問題を機能主義の立場からまとめた有名な著作がある。

このように、同じくソシュールの継承と発展という特徴は共通していても、ジュネーヴ言語学派の学者たちはそれぞれの方向性をもって活動している。カルツェフスキーの場合もその一人として、一応は先述の①から⑥を継承したと言ってもよい。特に、ラング／パロール論は、カルツェフスキーにおいては実に単なる術語継承であったと言っても過言ではない。しかしその他の面では、カルツェフスキーはこれらの諸概念を、「継承」というよりは、ジュネーヴ言語学派の中でも特殊な方向に「発展」させたと言うべきであろう。

カルツェフスキーはバイイに師事し、バイイからの学びは大きかったかもしれないが、その方向性は結局、師バイイとは異なっている。バイイは、パロールを心理学的な観点から「生きた言語」ととらえ、その対立概念としてのランゲージュを社会学的な視点から「社会活動の産物」ととらえた。そして歴史的な視点を「完全に」廃することによって、「静的な」共時言語学を構築するという方向をとった。これに対しカルツェフスキーは「共時的視点」と「静止した視点」とを区別し、パロールとラングの区別自体を目的化することはせず、言語のメカニズムを解明することに重点を置いた機能主義の立場をとる。この点をプラハ言語学サークル的だと評価する



のは適切であろう。先述の共時態のとらえ方によって初めて、この立場が可能となっているからである。しかし、これもまたジュネーヴ言語学派的だ<sup>(22)</sup>と言う場合は、単に、先述の比較的拡散的な同派の方向性のひとつにカルツェフスキーをも数えたということに過ぎないのではないだろうか。

バイイが情緒感情表出というパーソナルな性質に着目した言語文法論を構築したことは、言語のゆれ、および曖昧性の説明という観点から見ると、カルツェフスキーとは対極の立場、つまり、言語活動（ランガーシュ）には社会的な拘束があるにしても、結局感情表出の用具としての個人的なパロールが言語のゆれを保証するのだという立場にたったものと言うことができる。

つまり、カルツェフスキーが言語構造そのものに言語の共時的なゆれの原因を求めたのに対して、バイイは、（最もパロール論にこだわりを持ったことにも表れているが）、言語のゆれの原因を個人のパロールの心理的な側面に求めたと考えられる。

バイイは「表現的であるためには、ランガーシュはたえず観念をゆがめ、拡大または縮小し裏返し、他の調子に移しかえねばならない」<sup>(23)</sup>と述べ、精神生活の中にあるランガーシュにおいては、様々な形式の情緒の型に表現性が型どられており、その型は真理や真相を曲げさえするのだが、言語使用者は大抵そのことに気づかないか、あるいは気づいたとしても悪気はない、という説明をしている。

このようにバイイは、言語のゆれの原因を個人のパロールの心理的な側面に求め、その結果、必然的に言語のゆれをネガティブに評価することになった。これに対しカルツェフスキーは、言語構造そのものに言語の共時的なゆれの原因を求め、言語のダイナミズムを言語が本来帯びている性質の一つとみなしており、論文『言語記号の非対称的二重性』<sup>(25)</sup>においてその理論化も試みている。この理論は、言語記号と、その記号によって表わされる意義とが、非対称的二重性を持つという理論で、言語における、表わし手の記号と表わされ手の意味とは、対として安定してはいず、相互に一对多数のペアであり、かつ、「現実の傾向」に触れてはそのペアが揺らぎ変化する動的な構造を持つ、とされる。このように、非対称的な二重

性を持つ記号と意味とは、つねに相克しているので、（通時的にではなく共時的に見た）言語のゆれ、曖昧性が生じる、という理論である。

この理論においては、しばしばソシユール理論をそのまま後継した学者に見られる発想、すなわち、言語の本来あるべき形を個人が悪意からではないにせよ乱す、という、変異を否定的に見る発想からの完全な脱却が見られ、言語の共時的なゆれがつねに言語構造に内在するべきものとして認識されていることが明らかである。

当時は、ドイツの青年文法学派に見られたような、言語の変化を通時的に論じた研究が伝統的なものであって、共時言語学は、その伝統の流れとは一線を画す形でジュネーヴ言語学派が新しく呈示し、プラハ言語学サークルがさらにその概念を革新的に修正した。共時言語学は、いわばたいへん新しい学問であった。従って、生きたことばにおける言語の共時的なゆれ、曖昧性、言語の動的な性質について論じることすらまだ少なく、しかし論じる必要は高まっていた。こうした中、言語の史的变化でなく変異を共時言語学の視点から論じた、しかも、言語のゆれに対するマイナス評価を伴う視点からではなく積極的な視点から論じたのが、カルツェフスキーであった。

#### 註

(1) *Cahiers Ferdinand de Saussure* 1941- Genève の略。

(2) Кузнецов, В.Г. " Язык как орудие культуры в концепции лингвистов Женев. школы " *НДВШ.ФН.* №2. 1975 などに見られる。

(3) カルツェフスキーの伝記的な資料は多くの文献に散在している上、総じて断片的であり、細部に不一致も多いので、以下の資料を中心にまとめることを試みた。

a) Jakobson, R. *Selected writings II*. Paris, 1971 P.517-521

б) Пospelов, Н.С. " Из истории языкознания - 0

лингвистическом наследстве С. Карцевского " ВЯ. №4, Р.47-56. 1957

с)Поспелов, Н.С. " Из истории языкознания - из неопубликованного наследства С.О.Карцевского " ВЯ. №2, Р.123-124. 1961

d) S.Stelling-Michaud " Notice biographique " CFS. 14 Genève, 1956

e) Ed. by Peter Steiner *Slavic Series №6 The Prague school Selected writings, 1929-1946.* University of Texas Press, Austin, 1982

f) Кузнецов, В.Г. " Язык как орудие культуры в концепции лингвистов Женев. школы " *НДВШ.ФН*, №2. 1975

g) Кузнецов, В.Г. " Из истории науки " - ВЯ. №6, Р.125 1984

(4) Поспелов, Н.С. " Из истории языкознания - из неопубликованного наследства С.О.Карцевского " ВЯ. 1961, №2, Р.123-124

(5) トゥリオ・デ・マウロ『ソシユール一般言語学講義 校注』邦訳：而立書房 Р.353 参照。ただし、他の研究者は、カルツェフスキーが1905年にソシユールの学説を聴いた可能性については触れていない。トゥリオ・デ・マウロの本で示された参考文献の中では、Введенский 1933（入手不可能）にその根拠が述べられている可能性がある。これは以下の文献で指摘されていることである。千野栄一『言語学の楽しみ』大修館 1980「ソシユールとソビエト言語学」の章より Р.259-260

(6) トゥリオ・デ・マウロ『ソシユール一般言語学講義 校注』Р.353

(7) *Русская школа за рубежом 1923-1929* Прага の略。

(8) Карцевский, С. " О формально-грамматическом направлении " *RSR*. Прага, 1925

- (9) Карцевский, С. *Русский язык - грамматика*. Прага, 1925
- (10) これについては  
V. Mathesius "Ten years of the Prague linguistic circle"  
の中に詳しい記述がある。 Josef Vachek *The linguistic school of Prague*. London, 1966 P.137-151
- (11) 以下のような一連の著作がある。ただし30年代以降は言語学、ロシア語学の論文ばかりが見られる。
- a) С. Карцевский *Новая орфография*. Прага, 1923
- b) С. Карцевский *Родной язык и школа*. Прага, 1923
- c) С. Карцевский *Национализм в школе - Освещение событий 1914-18 гг. в школе в различных государствах*. Прага, 1926
- また、ロシア語教科書やロシア語学の本に関する書評も数多くある。
- (12) *Travaux de Cercle Linguistique de Prague 1929-1939*  
Prague の略。
- (13) Karcevski, S. "Du dualisme asymétrique du signe linguistique" *TCLP* 1. Prague, 1929
- (14) Bally, Charles *Le langage et la vie*. Genève, 1913  
邦訳：小林英夫訳 シャルル・バイイ『言語と生活』岩波書店
- (15) Benveniste, E. "Nature du signe linguistique" *Acta Linguistica*. 1. P.23-29 Copenhagen, 1939
- (16) Bally, Charles "L'arbitraire du signe. Valeur et signification" *Le Français Moderne*. 3. P.193-206 Paris, 1940
- (17) Buyssens, Eric "Les six linguistiques de F. de Saussure" *Langues Vivantes*. 7 I-P.15-23; II-P.46-55 Bruxelles, 1942
- (18) Sechehaye, Albert *CFS*. 4 P.65-69 Genève, 1944

(19) Godel, Robert *A Geneva school reader in linguistics.*  
London, 1969 P.3

(20) Frei, Henri " La linguistique saussurienne à Genève  
depuis 1939 " *Acta Linguistica*. 5 Copenhagen, 1947 P.107-109

(21) Frei, Henri *La grammaire des fautes.* Paris-Genève,  
1929 邦訳あり： 小林英夫訳 アンリ・フレエ『誤用の文法』  
みすず書房 1973

(22) 例えば Кузнецов, В.Г. " Язык как орудие культуры в  
концепции лингвистов Женев. школы " *НДВШ.ФН.* 1975, №2 に典  
型的に見られるような、カルツェフスキーがジュネーヴ学派だとい  
う主張に対しては、特にそれが旧ソ連時代の研究の場合は慎重に対  
応しなければならないと思われる。そもそも、カルツェフスキー研  
究の数そのものが旧ソ連では極めて少なかった。これもまた彼が亡  
命者であって、国家に是とされる「思想」を持たなかったという事  
情におそらく関わるものであり、おそらく、もしどうしてもカルツ  
ェフスキーを取り上げるならば批判的な態度が望ましかったという  
出版事情があったことと考えられる。旧ソ連ではソシユール研究で  
さえ（1917年から19年にかけてカルツェフスキーがソシユール  
を伝えたのにもかかわらず）戦後によりやく着手され、『一般言  
語学講義』の翻訳は1977年のA. A. ホロドヴィチを、本格的  
なソシユール研究は70年代のN. A. スリュサレヴァを待たねば  
ならなかった（しかもこれはやや異色のソシユール研究となった）。  
旧ソ連においては、ポドゥアン・ド・クルトネの理論とソシユール  
の理論の間に共通点が多かったため他国に比べソシユールをそれほ  
ど評価する必要はなかったのだという主張も多いが、そのみなら  
ずやはりソシユールが「西欧思想」であったがために「受容」が遅  
れたというのは言い過ぎであろうか。

(23) Bally, Charles *Le langage et la vie.* Genève, 1913  
邦訳：小林英夫訳 シャルル・バイイ『言語と生活』岩波書店